2024.8.1　No.3

ＨＩＯＫＩ財団 通信

HIOKI奨学･緑化基金 事務局

長野県の若者たちの才能を照らす道
～夢と成長を支える 15 年～

公益財団法人 HIOKI 奨学・緑化基金
副代表理事　岡田基幸

Jerusalem , 31 Aug. 2019

長野県の学生たちが自分の夢と情熱に従って歩む道を支援させていただくことは、私にとっても貴重な経験であり、大変嬉しいことです。2009 年から弊財団の理事を務めており、早いもので 15 年が経過しました。初めて面接した学生たちは今や 33、34 歳になり、社会で重要な役割を果たしていることでしょう。彼ら彼女らは、いわゆる、Y 世代（ミレニアル世代、1981 年から 1996 年頃生まれ）や Z 世代（1997 年から 2012 年頃生まれ）に属しており、面接を通じて、私の方が刺激を受けることも多々ありました。将来、企業で要職を担う方はもちろん、自ら事業を立ち上げて経営者として活躍する方もおられることでしょう。

私が理事を務めた当時の学生たちは、デジタル技術の普及期に成長し、インターネットやソーシャルメディアに親しみを持っていました。また、環境問題に敏感な学生が多いと感じました。最近の学生たちはデジタルネイティブであり、生まれながらにして高度なテクノロジーに囲まれて育ち、環境保護や社会正義に対する意識が高いです。実際に行動を起こしている学生も現れました。コロナ禍では、学校への登校が停止され、オンライン授業が行われるなど、「ニューノーマル」の経験者でもあります。さらに、SNS 等を通じて自己プロモーションにも積極的です。私には、Z 世代の子どもが 3 人います。15 年の間に、若者の意識や行動がどのように変わるかを、親子関係だけでは気づきにくいことが多いことも実感しました。

長野県の自然は壮大で、文化も豊かです。この環境で育った学生たちは、自然と共生しながら学び、独自の視点を育んでいます。教育の重要性は、知識の獲得を超えて、世界が直面する広範な課題に対する取り組みにあります。現代の大学生は、将来に対して前向きである一方、雇用の不安や社会課題に対する強い意識を持っています。地球規模の問題への解決策を自らの視点から模索し、社会的・環境的問題への理解を深め、具体的な解決策を見出そうと努力しています。彼ら彼女らは個人的な成功を超えて社会への貢献を望み、多角的に課題を捉え、持続可能な未来への道を切り開こうとしていることを感じます。これらの姿勢は非常に心強いです。本奨学金プログラムが、学生たちが自身の限界を超え、成長するための推進力になっていると信じています。

長野県の未来は、ここで育つ若者たちに委ねられています。彼ら彼女らの創造性と情熱が、地域を豊かにし、持続可能な明日への道を切り開くでしょう。意欲溢れる若者の成長を優しく支え、長野県で新たな歴史のページをめくる手助けをしたいと思います。今後も弊財団の理事として、彼ら彼女らの道を温かく見守りながら、地域社会への貢献と、長野県のより良い未来を築くための礎を一緒に作り上げていきたいと思います。

◆ 岡田副代表理事 Profile
上田市の産業振興に携わり、製造業支援、女性の創業、大学発ベンチャー、次世代農業、広域連携などを広く実践。第1回イノベーションコーディネーター大賞 文部科学大臣賞、イノベーションネットアワード 2022 全国イノベーション推進機関ネットワーク堀場雅夫賞 他受賞。一般財団法人 浅間リサーチエクステンションセンター（AREC）専務理事・センター長、東信州次世代イノベーションセンター センター長、他を務める。　　おかだ もとゆき　信州大学 特任教授 工学博士

◇奨学生の皆さんの「近況」からご紹介します。

信州大学 繊維学部　4 年　H.K さん

5 月 11 日(土)に、日頃お世話になっている HIOKI 奨学・緑化基金様が苗木を寄贈されている、「みんなで育てる協働の森づくり」という植樹祭に参加させていただきました。千曲市大池市民の森で行われた植樹祭は、総勢約 260 名が、1000 本の苗木を植えるという、かなり大規模なもので、参加者は地域の小・中学生から、企業や協会・組合の方まで、幅広い年代でした。

会場は雲一つない快晴に恵まれ、まさに植樹日和でした。植樹の手順は、鍬で穴を掘り、堆肥を入れて、苗木を穴に入れて植えるというもので、植えた苗木は背丈が 50cm くらいのものが多かったです。しかし、この苗木はいずれ緑豊かな森林になりますが、そこに至るまでには非常に長い年月を必要とします。私が植樹祭の参加者としてその物語のはじまりに立ち会えたことは、非常に稀有な経験であり、感慨無量の至りです。このような貴重な機会を頂くことができ、来年以降もこのような植樹活動が開催されるならば、ぜひとも参加させていただきたいと願っています。

慶応義塾大学　理工学部　卒業 / ブラウン大学(アメリカ)　進学　Y.S　さん

大学 4 年間を振り返って、実に多くのことをやり切ったという実感があります。勉学に関しては 1 つの科目も手を抜くことなく、結果的には大学を首席で卒業することができました。大学院科目も先取りで合計6つの授業をとり、どれもよい成績を取ることができました。

研究室活動に関しては、大変多くのセミナーに参加させていただき、話の内容がわからないながらも最先端の研究に触れることができたのはよい経験となりました。また卒業研究を通して、研究室の先生である山本先生の鋭い指摘を幾度となく目の当たりにし、自分自身の物理学に対する姿勢も変わりました。内容としては素粒子標準理論やブラックホール熱力学といった、大学入学当初にまさに学びたかったもので、大学 4 年間の物理学の学びに対して、よい終わりを迎えることができました。

研究室外活動として、海外にいる 3 名の方と研究活動を行いました。卒業研究とは違い本格的な研究を行うことができて、非常にいい経験になりましたし、今後もっともっと研究をしたいという気持ちも芽生えました。最終的には 1 月末に論文を出版し、この研究活動を形に残すことができてよかったです。私ができることはほとんど僅かでしたが、それでもサポートし続けてくれた Scott、Yukari、Semeon には感謝しきれません。

サークル活動に関しては多くの友人を作り、200 人規模のバスケットボールサークルで代表を務めました。学科が物理学科ということで、普段聞けない文系の方々の話をそこでは聞けてサークルの友人たちと集まるときはいつも学びがありました。先日行われた追いコンでは、サークル運営に積極的な後輩たちの姿が見え、また私たちに一人一人感謝の気持ちを述べていて、このサークルに精力的に活動できてよかったなと強く思います。ここでできた友人や先輩後輩はこれから先も関わっていきそうです。

自主ゼミ活動に関しては、友人にとてつもなく数学ができる方がいたことと、議論が好きなメンバーが多く集まったため、数学の分野でも視野を広げることができました。今でも個人的に数学の勉強を続けられているのは、自主ゼミ活動に参加していたことによるものが大きいです。語学の勉強としての英語学習は、海外の大学院進学を目指すということもあって、TOEFL の勉強を頑張っていました。結果として自己ベスト 104/120 を取得することができ、大学院の出願の必要最低点を超えたということだけでなく、自分自身の英語力の成長を実感し、思いがけない達成感を得ることができました。

バイトに関しては、2 年の春より個別指導の塾で講師を続けていました。4 年生のときはほとんど行けなかったものの、最後まで塾長とは仲が良く、最後には卒業祝いのご飯にも連れて行ってくれました。また塾のお別れ会も開催してくれ、後輩たちから色紙や感謝の言葉もいただきました。また以前担当していた生徒たちが大学に進学していくのを見届けることができました。友人に誘われて始めたバイトでしたが、ここでも友人関係が広がり、講師という大切な経験を積むことができました。

旅行についても、国内の 30 近くの県、国外ではアメリカ、フランス、ドイツ、チェコ、イタリア、バチカンに行きました。これらの経験は改めて日本を理解するきっかけになりましたし、国際性について真剣に考えるようにもなりました。

他にもまだまだ書きたいことがありますが、とにもかくにも、コロナ禍で入学を迎えた当時では考えられないほど多くの経験を積むことができました。4 年間全体を振り返ってみても充実しすぎていたほどでした。唯一の無念は、コロナによってほとんどの留学プログラムが無くなり、学部生中に留学に行けなかったことです。これだけは致し方ないものだったと思っています。

進学先については海外大学院の合格発表ができっていないため最終決定ができていません。現時点では Brown University の合格を得ていますが、もう少し結果を待ちたいと考えています。学部生での留学ができなかった代わりに多くの経験を得ることができました。留学は大学院にお預けということで、これからの大学院生活に期待したいと思います。

これほど多くのことをたったの 4 年間で経験し、卒業を迎えることができたのは、経済的な余裕を大きく作っていただいた HIOKI 奨学金のおかげであるのは間違いありません。私を奨学生に採用していただいたこと、4 年間支えてくださったこと、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。